

## 演出から一言、番外編的なメモ

プランAを立てる際には、プランAがもしダメだった場合のプランBも立てておく、というのが、「計画」というものを立てる際の鉄則、基本中の基本くらいに言われている。昨今では、政治がこの方法を採用していなくて、稚拙なプランAが予定通り？に頓挫してから、プランBを考えてもいなかった政権が迷走して酷いことになり批判が集まる、って場合によく出てくる話だが、大事なことなので自分も心に留めておきたいと思ったりする。

しかしこれって労力は倍になるし、難しい側面もあるにはあるが、それが「知」だと言われれば、その通りかも知れないか。「知」とは机上の空論ではなく具体的なだから。

それで、演劇の話だが、そこから想像力を膨らませて、最初に書いた「場面A」がダメになった場合の、「場面B」とはどんなものだろうか？と考え始めた。そう考えると、プラスの意味でも、失敗を想定している意味ではマイナスとしても、創作の発想の幅が広がると考えてみた。もしかしたら、これが新しい入口になるかも。次やるこの作品で、ちょっと実験してみたいと考えている。それでうまく行ったら、その後もこの方法を使い続けたい。

それと、イサムノグチのTVでのドキュメンタリーで感じた話を追加で。札幌の大通り公園の中に、イサムノグチの彫刻「ブラック・スライド・マントラ」がある。これは、もともと、そこにあった「クジラ山」と呼ばれる自然の傾斜を利用した大きな滑り台を撤去して、その代わりに設置される計画であった。しかしノグチは、現場を見て、子供達が遊ぶ「クジラ山」の撤去到反対し、その代わりに、その目の前にあった公園を分断していた車道を撤廃してそこも公園にして、そこに自分の彫刻（これも滑り台なのだが）を設置するように主張し、そのように行政を動かした。それには心が動いた。それで、「アートと社会」、いや、社会ほど大きな括りでなくともよくて、「アートとそれ以外との関係」について考えている。影響力みたいなものについて。

演劇は、そりゃアートの範疇で考えてもオブジェではないし、ノグチと似たようには考えることは出来ないのかも知れないが、現在のコロナ禍において、アートは生活に欠かすことが出来ない、と言われる欧州的な思考にも惹かれるし、ちょっと、このようなことを念頭に置いておいて活動するのはいいことだと感じた。

欲張ってはいけませんが、頭にそれがあるのと、ないのとでは、自ずと出る答えが変わってくると思っている。

まだまだ、ただただ演劇を行うのではなく、もう少し前進して行きたい。演劇で社会とつながりたいと思うのだが、さあ果たして。

長堀博士、記